

事業活動実績報告書

施設名	学校法人希望学園 葛飾こどもの園幼稚園
教育理念	愛され必要とされる実感を持ち、多様な人を受け入れつながり合う人間教育の追求。

事業の区分 (5領域)	健康 ・ ○人間関係 ・ ○環境 ・ 言葉 ・ 表現
1 事業名	インクルーシブな保育実践の推進
2 実施期間	令和5年4月1日 ～ 令和6年3月31日

3 取組概要	<p>(取組日) 令和5年4月3日 ～ 令和5年4月30日</p> <p>(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること</p> <p>今年度入園してきた保護者や園に関係する方々を中心に、インクルーシブな保育の考え方、当園なりの生活や保育方法、注意すべきことなど話をする機会を持った。年間をとおして月1回程度の小父母会を行い、継続的にインクルーシブな保育にかかわる保育の質や方法、保護者の方々の保育への参加の意義や願いをお伝えしながらの一年となることを確認。</p>	
	<p>(取組日) 令和5年4月3日 ～ 令和5年4月30日</p> <p>(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること</p> <p>教職員の年度始めの共有するテーマとして、“一人ひとりの子どもとつながり、その子の保育を作る”ということと、“保護者同士の支え合いが生まれる環境作り”を確認し合い、昨年度の反省をとおして今年度、重点的に意識し研修していくテーマを導き出し、年間研修計画を話し合う。保育者、管理者12、3名が2グループに分かれて大学の准教授2名と共に月1回ケース検討会を実施。</p>	
	<p>(取組日) 令和5年5月1日 ～ 令和5年5月31日</p> <p>(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること</p> <p>今年度のテーマとした“一人の子どもと向き合うことから始まる、子ども同士のつながり”を念頭に置き、日常のゆったりとした遊び場面や体験活動(春ハイキングや遠足、お誕生会、人形劇、健康診断など)をとおして、クラスの子も一人ひとりの様子や親子のかかわりを丁寧に捉え、把握していった。各クラスにおいては“今向き合うべき子ども”を上げ、見守りや観察、かかわりと遊びを継続的に続け、その子の状態の把握と今後の保育の検討を繰り返した。</p>	
	<p>(取組日) 令和5年4月1日 ～ 令和6年3月31日</p> <p>(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること</p> <p>今年のテーマを意識しながら、クラスごとにケース会議等において、その子の“仲間と一緒に楽しみたいが、何らかの理由により参加できない状態”を報告し合う。そこに、どんな理由があるのか、なぜ別の行動をとるのかなど、担任以外の視点も含めて検討を繰り返した。その検討より、その子のための保育方法や遊び、かかわりを導き出していくコミュニケーションの場を日常的に繰り返した。</p>	

3 取組概要	<p>(取組日) 令和5年4月1日 ～ 令和6年3月31日</p> <p>(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること</p> <p>各クラスでの、一人の子どもとの向き合うことから変化してくる保育者との関係性を報告し合い、そこから始まる”子ども同士の関係性のつながりや深まり”について見守り、クラスの活動がより”子ども主体の活動”となっていくこと注目し、園全体に報告。これらのさまざまなケースについては、障がいがある、ないに関係なく、その時点で混乱し困っているであろうことが想像される子どもたちを対象とした。</p>	
	<p>(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること</p> <p>問題と見える行動をとる子どもについて”やってはいけないこと”と繰り返し伝えるばかりでなく、なぜ、そのような行動をとるのかなど本人と遊びを通した関係性のなかで聞き、受け止めることを繰り返した。そして仲間で話し考えてみる機会を日常としていった。①子どもの苦しみや、一緒に楽しむことができない要因などを伝えた。②周りの子どもたちの感じるストレートな思いをまずは受け取る。③その上で保育者の思いや気持ちを伝えることを繰り返した。</p>	
	<p>(取組日) 令和5年4月1日 ～ 令和6年3月31日</p> <p>(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること</p> <p>年間をとおして、向き合って関係を積み上げていく過程の子どもの様子や、その子どもをとおした仲間の関係性の变化などを、その都度保護者に立ち話など時間を作り伝え報告。父母会などでは、クラス全員の保護者、また、全園児保護者にクラスが作られていく過程のエピソードなどを話し、その対話し向き合う保育の意味を伝えた。</p>	
	<p>(取組日) 令和5年 4月1日 ～ 令和6年 3月31日</p> <p>(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること</p> <p>クラス活動において、支えを必要としている子どもたちの活動や行事への参加について、楽しんで参加しているかなど状況確認と”その子なりの参加の方法”をクラスごとにエピソード的により報告。その子なりの保育の作り方や工夫、アイデアを全体で検討しながら共有。これらの情報などの報告を受け、各クラス担任は助けが必要な子どもの保育づくりの参考とした。</p>	
	<p>(取組日) 令和 年 月 日 ～ 令和 年 月 日</p> <p>(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること</p>	<p style="text-align: center;">写真添付 活動内容が分かるもの 取組に関するもの</p>
	<p>(取組日) 令和 年 月 日 ～ 令和 年 月 日</p> <p>(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること</p>	<p style="text-align: center;">写真添付 活動内容が分かるもの 取組に関するもの</p>



効果検証報告書

施設名	葛飾こどもの園幼稚園	
教育理念	愛され必要とされる実感を持ち、多様な人を受け入れつながり合う人間教育の追求。	
事業の区分(5領域)	健康 ・ ○人間関係 ・ ○環境 ・ 言葉 ・ 表現	
1 事業名	インクルーシブな保育実践の推進	
2 事業概要	障がいに関心を持ってではなく、今、困っている子ども、家庭に対して、誰もが自然と支え合えるような園環境を整えていく。このことのために、保護者を含む大人や関係者についても話をする機会を作り、子どもを取りまく周囲の理解を深め、人と人の支え合うつながりを作っていく。	
計画時	3 実施体制	取組に必要な環境(人員、事業の遂行に必要な技能やノウハウ等)の保有状況 異年齢1クラス20名の子どもに対して全クラス3人担任制とし、その他に2名の保育支援担当を立てる。教職員は、毎月2回クラスごとに行われるケース研究会において、担任の葛藤やねらいとしていることなどをインクルーシブな保育の視点を持ち、定期的に話し合う。2名の保育支援担当は、園全体に目を向け支援を必要としている子どもや保育者、保護者を支える方法をクラス担任と共に検討し、必要があれば園全体で共有できるようにする。
	事業後	3についての効果・検証 事業実績から推測される効果や改善点等 3人担任制であることにより、どのような時間であっても対象児と個別的なかわりの時間を作ることができたり、数人でかかわり遊びを展開する場を作ることが可能となっていた。このことにより、一人の子どものことを”よく知る”ことやその時の状態、思いや気持ちを推測していくことに生かされた。また、クラス担任以外の2名の保育支援担当により、クラスの担任からは見えなかつたり感じにくいような子どもの様子などに声を掛け合い、保護者を含めた援助を担当と考えることができた。
計画時	4 事業のねらい	このインクルーシブな保育とは、保育の技術や保育の方法に終始するのではなく、保護者や園関係者、また、地域を含めた方々への周知と理解につなげ、障がいを持つ方を取り上げ支えるのではなく、今目の前で困っていたり苦しんでいる子どもや家族、人々に自然と声をかけ支え合うことのできる社会を目指す保育であると考えている。外国籍の家族が習慣の違いや言葉の困難さを抱える状態、日常生活が整わず生活習慣が安定しない家庭、生活する上で様々な刺激や環境の変化に戸惑い自身の力だけではコントロールすることが難しい方々(子ども)、また、今、自身の居場所を作り出すことができず不安定になるような状態の方々など、障がいがあるからではなく皆で支え合うことのできる園生活を目指していくことが狙いとなっている。
	事業後	4についての効果・検証 事業実績から推測される効果や改善点等 障がいの有無にこだわることなく幅広く”その時点で困っている、苦しんでいる方(子ども)”に対して支えるための目を向けるということは、子どものなかに入り込み”見守り”と”対話”することによる、今、誰がどのような状態で苦しんでいるのか、何に対して困っているのかということを知ることが推測していくことの重要性を感じた。このことのためには、保護者の方や子どもとのコミュニケーションについても、なんでも話してできる環境や状況、関係性が必要となり、保育の質が問われる結果となった。
計画時	5 取組の内容	計画スケジュールを含む詳細な取組内容、経験させたい内容等  運動会で参加の難しいと想像される年長女児について園全体で保育検討を行う。勝ち負けに対する認識がなく、ルールが伝わらない女児に対して、どのように競技とするのかクラス年長児の子どもたちと話し合いを行った。 子どもたちから出る”相手を思うことのない発言”から始まり、激しく悔しがり気持ちを素直に出さない年長男児と”向き合う”ための保育が繰り返され、男児と担任の関係が改善されはじめると、その年長女児に気持ちを向けるように「～ちゃんの好きなものを作ってみたい」とい姿が見られるようになってくる。その女児に気持ちを向ける行動は、その男児からクラスの年長児に広がり、肯定的な発言や行動が見られるようになり始めた。好きなキャラクターのTシャツ作りを提案し皆で作ったものを笑いながら着たり、一人ひとりが気持ちを聞くように問いかけ手を差し伸べたりするものに対して、笑いながら手を出すやり取りや手を繋ぎ共に走ることを楽しむかのような様子に、仲間となっていく過程を感じた。 数か月間、その女児の参加により勝ち負けで結果が出ず、悔しさを押し殺し女児に対して否定的な思いを抱き、やる気を出さず投げやりな状態や他人事のように素知らぬ顔をしていたクラスの年長児が、その運動会後も、クリスマスや劇遊び、お別れ遠足などの活動において、その女児らしく仲間と共に楽しむ姿を受け入れてきた状況を、その時の様子を数名が楽しそうに語りだしたり絵を描いたりするを、教職員間や保護者達に話し共有した。 教職員間では、まとめとして振り返りを丁寧に行い、子どもと”向き合う”ことの質について検討し、①待つことのできる関係作りができたこと。②男児の相手を否定するかのよう悔しさを受け止めることができたこと。③ふてくされ仲間と距離を置いた数日を静かに見守れたこと。④男児の気持ちを受け入れた上で、担任の思いをじっくりと話ることができたこと、などについて確認をした。この関係作りから保育者の、仲間に真摯に向かう姿や、向き合い変化が見られた男児の行動による影響の大きかったことから、担任を含めた仲間につながりが生まれ勝ち負けで荒れるように気持ちをぶつけ合った経験を越えてクラスがまとまり動き出すのを感じることができた取り組みとなった。
	事業後	5についての効果・検証 事業実績から推測される効果や改善点等 普段、保育において子ども同士のつながりを生み出すためにも、保育者が一人ひとりと”向き合う”保育を積み重ねることが大きく影響しているのではないかと考えられた。特に、コミュニケーションを自然と取ることが難しい場合などは、保育者がつなげる役割として必要な場合が多くあるため、保育者が支えを必要とする子どもをよく知り身近な存在となること、そして、保育者の行動や考え方、感じ方、思いなどが自然と伝わって行くような”人と人のつながり”(信頼関係)作りの質が問われると感じた。

計画時	6 環境構成	その時の子どもの状態や様子、成長に合わせて、どのような時間帯でも一人の子どもに合わせたオーダーメイド型の保育が作れることを大事にした。また今回は、突発的に起こることのある、放って置くことのできない”相手を否定するような言動”や”暴言”などに即座に対処したり、一人の子どもに対して保育者の思いを伝える場面をタイミングを捉え作っていくことができるよう保育者間で確認し、柔軟に対処できるよう準備をした。基本は、異年齢クラス内の年長児7、8名による少人数で考えたり思いや感じていることをストレートに出し担任に受け止められることを積み重ね経験することに重点を置いた。特に、運動会のような行事については、全体での練習以外にクラスの年長児7名ほどの小さな単位で練習し皆の役割や担当、そして、その子の楽しみ方に合わせた動きや役割を考えた。合図を出す、音楽を鳴らす、掛け声をかける、マイクで説明やナレーションを付ける、皆の中を走り回るなど・・・皆に違った役割あり、その一つひとつが必要とされ大切であると感じることのできるグループ活動とする。そして、保育者が一人の子どもに関わり遊ぶ時間を中心に置く。
	事業後	事業実績から推測される効果や改善点等 さまざまな場や環境を整えそれぞれが生かされ連動させることにより、子どもの変化していく状況に合わせた対応や、子どもの様子により柔軟な対応、かかわりができたと考える。一人ひとりの状態や成長は様々なので、様々な環境を準備することは必要となり、自分の一番身近な担当が当然のようにさまざまな対応をとるということが子どもたちに対して大切なメッセージとなっていると考えられた。
計画時	7 期待される効果 児童の姿	取組を通じて期待される児童の姿や効果等 一人ひとりの子どもに対して、その時必要な時間やかかわりを十分に取るということは、特別なことではなく担任にとっては、いつ誰にでも考えられる大切に行っていることと感じるようになっていくと実感している。特別な子どもに対する特別なかかわりではなく、自身も保育者の前に気持ちを出し受け止められる経験をしているということは、多様な仲間を受け入れるということにおいて重要な保育となっている。単純にやさしい子どもになるとか理解のある子に育つということではなく、さまざまな出来事とおして仲間と共に感じ考え、何かあるごとに立ち止まり問題意識を持つことができること、仲間と考えることができること、多様な人々を排除するのではなく自然と受け入れ生活できること、自身の考えを持つことができ、伝えたり聞き受け止めることができること、相手の良い部分を感じることができること、相手を感じようとする姿がでてくる。
	事業後	事業実績から推測される効果や改善点等 インクルーシブな視点において、安易に効果を期待するということはずべきではないと考える。日常に起こる小さな出来事の積み重ねを大切にしていこうことにより積みあがっていくものは、何か変化するとかできるようになるということではなく、興味関心を持つこと、触れて感じ考えること、問題意識を持つこと、自身がある意味満たされて相手に気を向けたら思いを寄せること、長い目で見て人とつながり楽しむことができることではないかと考える。
計画時	8 効果検証 総括	事業を通しての感想、今後の教育・保育に向けて このインクルーシブな保育とは、特別に学び、特殊な保育をすることと考えられがちであるが、実はごく自然な人と人が深く関わり合う保育であり、保育の質を高めようと常に考え新たに作り出していく保育ではないかと考える。今回は、一人の子どもとの”向き合う”ということから始まり、その”向き合う”ことの質を高めることにより支えを必要としている子どもとの接点や楽しみ、活動が作られていったということから、一人の子どもや保育者の本当の気持ち、人に伝えたいと思っている思いが大切にされることにより、人のつながりが作られていく過程を実感することができたように感じている。このことは、特別なことではなく保育そのものであり、保育の充実により実感できたものである。また、この保育は、家族や保護者の理解と大人のコミュニケーションやつながり、そして、支え合いが不可欠であり、これらを含めた保育の質の充実が重要であることも改めて感じられた。この保護者との保育は、一人の子どもを取り巻く周りの大人の理解や成長であり、今後の課題となると考えている。